

2021年10月3日 世界聖餐日(聖霊降臨節第20主日)礼拝メッセージ

「後の者が先になり、先の者が後になる」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 21章 28-32節

毎月、私たちは第4日曜日の礼拝後に、たくさんのおにぎりを作って釜ヶ崎のいこい食堂へ届けています。先週も132個のおにぎりを作って持って行きました。10歳と5歳になる私の娘も一緒に行きましたが、10歳の娘がいこい食堂の前の公園でおにぎりをお渡ししていると、一人の方が「なんでこんなんしてくれるん?」と聞いて来られました。彼女が答えに詰まっていると、その方は続けて「前に『なんでこんなんしてくれるん?』って聞いたらな、牧師さんがな『そりゃ、愛してるからよ』って言ってくれてん」と教えてくれました。

その牧師さんというのが、一体誰のことを指しているのかは分かりません。いこい食堂を切り盛りしている米加田先生も牧師さんですが、釜ヶ崎にはその他にも、キリスト教だけでも様々な教派の教会や団体がやって来ています。拡声器を持って来て熱心に布教し、「神を信じる」「洗礼を受ける」と言うと、炊き出しをくれるという団体もあるそうです。ですので、釜ヶ崎には何回も洗礼を受けたことがあるという人もおられると聞いたことがあります。ですから、「炊き出しやお弁当をあげるのは、愛しているから」と言われたというのは、そのようないわゆる伝道熱心な教会の牧師さんが言われたのかもしれない。

おにぎりを受け取りに来られる方の人数は、日によって異なりますが、その日は公園でお渡しした後にはまだたくさん残っていたので、それらを持って、2年前に閉鎖されたままの旧センター(あいりん労働公共職業安定所)の周りにも行きました。閉鎖されたシャッターの前には様々な荷物が積み上げられていますが、その道端に座っておられる方や、横になっておられる方々に、子どもたちが「おにぎりはいかがですか」と声をかけながら、おにぎりをお渡しして行きました。時には断られたり、無視をされたりすることもあります。5歳の娘に渡されると「こんな子に渡されたら、断れへんなあ」と笑ってくださる方もおられました。また娘が路上に荷物を置いて座っている方に「なんでこんな所で暮らしてるん?」と率直に聞くと、その方は少し困ったような顔をされて「ほかに行く所がないしなあ」と答えられました。

おにぎりを配り終えた帰り道に、彼女が「お金が無くなって、お家に住んでいられなくなったら、ああやって『秘密基地』みたいにして暮らさないといけないの?」と私に聞いて来たので、世の中には生活保護や生活困窮者自立支援のシェルターなど、様々な対策があるということを伝えました。しかし、それらのようなセーフティーネットではすくえない現実があるということもまた事実です。何百人もの路上生活者の方々を目の前にしながら、私たちが時々おにぎりをお渡ししたり、炊き出しをしたりしても、根本的な解決にはつながりません。あくまでも一時的な急場しのぎでしかないことは分かっています。そんなことしかできないことを心苦しく思いながらも、続けさせて頂いています。

一人の方が「なんでこんなんしてくれるん(なんでおにぎりを配ってくれるのか)?」と聞いて来られました。私たちはなぜ、おにぎりやお弁当をお渡ししたり、炊き出しをしたりするのでしょうか。目の前の路上で亡くなっていくかもしれない命を放っておけない、何とか関わりたいと思うのでしょうか。それこそ、それらをする事によって「天国へのパスポート」がもらえるとでも言うのでしょうか。もちろん、そんなことではありません。天国へのパスポートは、何をしても／していなくても、ただ神様から一方的に全ての人に与えられています。全ての命を創られた神様は、その創られた全ての命を愛おしく思っておられます。神様は私を大切にしてくださっているように、目の前の方も大切にしてくださっています。

おにぎりを受け取りながら「なんでこんなんしてくれるん?」と聞いて来られる方に対して、「あなたを愛しているからです」とは、私は答えられません。もしもそうならその方の自立支援に向かって、もっともっと関わらなければ嘘になるからです。家族や恋人など、一部の親しい人たちに対して向けられる「愛」という言葉を用いて、「全ての人を愛する」というのは、やはり嘘なのではないかと思っています。むしろ、「なんでこんなんしてくれるん?」という問いに対しては、「あなたの命も、私の命も、みんな大切だからです」とは答えられるだろうと思っています。

聖書には「この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち私にしたのである」(マタイ 25:40)という言葉があります。私もあなたも、目の前の方も、そして日々に接しておられる周りの方々も、みんな神様が大切にされている命です。そこには『私の愛』があるのではなく、『神様の愛』があります。神様の愛があるからこそ、私た

ちは隣の人を大切にすることができる。言い換えれば、私たちが隣の人を大切にすることを通して、神様の愛があること、全ての命が大切にされているということを証明していくことができるのではないのでしょうか。

さて、今日の聖書のお話は、聖書協会共同訳には「二人の息子のたとえ」という小見出しが付けられているお話でした。最初の 28 節には「ところで、あなたがたはどう思うか」とありますが、ここで「あなたがた」と呼ばれている、このたとえ話の聞き手は、どのような人々であったかと言うと、それは貧しい群衆たちではなく、エルサレムの都の神殿の境内の中にいた「祭司長や民の長老たち」(21:23)という指導者たちでした。

その後のたとえ話のすじ自体は簡単です。二人の息子を持つ父親が、それぞれに「ぶどう園に行って働きなさい」と言ったが、一人は「いやです」と答えたものの、やっぱり考え直して後で仕事をし、もう一人は「はい」と答えたものの、結局は仕事をしなかった、というものです。イスラエルの国の中でも、辺境の地として差別されていたガリラヤ地方で、その地に住む貧しい群衆たちに対して語られたイエス様のたとえ話の多くは、彼らの日々の生活体験、労働の実感を伴うような分かりやすいお話でした。しかし、今回のお話は何だかあまり現実的ではありません。

そもそも祭司長や民の長老たちは、何人もの労働者たちが働かなくては成り立たないような過酷なぶどう園の労働の現実を知っていたでしょうか。また家父長制で、父親の財産を長男が継承することが当たり前とされた社会の中で、父親から「ぶどう園に行って働きなさい」と言われたのに対して、「いやです」などと言うことがあり得たでしょうか(28-29)。また弟は「はい、お父さん」と答えたと翻訳されていますが、元々の言葉では「はい、ご主人様」という言葉です。「主人」という言葉は、自分の父親に対して使う言葉ではありません。これらのことから、このたとえ話が初めから、たてまえだけで実行を伴わない指導者たちへの皮肉であったということが分かります。31 節 32 節では、イエス様自身が解説していますが、イエス様よりも先に洗礼者ヨハネが来て、義の道、正しい生き方を示したにも拘わらず、あなたがた指導者たちは後からでも考え直して、信頼して歩みを起こそうとしなかった、ということです。

さて、このお話は、現代の私たちに何を伝えているのでしょうか。新型コロナウイルス感染症の感染者数が減少し、この10月より約半年ぶりに「緊急事態宣言」が解除されて、コロナ警戒信号も赤信号から黄色信号に変わりました。飲食店も短縮されていた営業時間が延びたり、人々が集まるイベントなども規模が拡大されて再開されたりするようです。その一方では、規制緩和に伴って、再び感染が広がっていわゆる「第6波」がこの冬にかけて発生してしまわないかが心配されています。そのような中、教会での礼拝や集会などの活動も、再開されていく所が多いのではないかと思います。

昨年から続くコロナ禍の中、共に集まるということが当たり前ができなくなった私たちは、こうして共に一つの所に集えることが大きな恵みであるということに、改めて気付かされました。しかし、こうして教会に集い、教会につながっている人たちだけにしか、神様の恵み、祝福はないのでしょうか。もちろん、そんなことはありません。もしもそのように感じていたら、それは誤解です。「自分たちこそ正しい」と信じていた民の指導者たちが、イエス様から批判されたように、自分たちは先にいると思っ込んでいるだけで、教会も実は後になっているかもしれません。

「後の者が先になり、先の者が後になる」……。福音書の中には、何度かこの言葉が異なった文脈で登場します。恐らくイエス様が言われたこの印象的な言葉が、多くの人々に記憶され、折々に思い出されて記録されたのだと思います。私たちは自分たちが「先の者」であると思っ上がることをのしないように、また「先の者」になることに固執することがないようていたいと思います。今日も、それぞれの場でありながら、身近におられる隣の人を大切にすることを通して、神様の愛があるということ、全ての命が大切にされているということを証明する歩みへと、私たちは導かれていきます。